

日蝕初見の記

大阪 津田 雅之

日蝕初見と申すが、(或は、又、終見かも知れぬが)兎も角も、私は去る1936年六月19日に初めて日蝕に御目にかゝつた。私共素人が遙々1500軒の北見まで日蝕観測——否見物——に出かけると言ふことは、如何にもおこがましい事でもあり、又、物好きな事でもあつた。

“皆既蝕と言ふものを一度は見たいものだ”との念願は豫ねて持つてゐた。そこへ、山本先生の激勵や要望があり、矢も楯もたまらず出かけんと決心したのは其の年の六月の初めであつた。

肉眼観測を専らにするつもりであつたが、段々慾が高まつて、双眼鏡、寒暖計、磁針、秒時計、黒眼鏡などを持つことにした。それに、16耗活動寫眞機をも携行したので、個人としては可なり多種のものを携へた。

観測地は遠軽を撰んだ。それは同地には花山観測隊高城班があるので、かねて高城氏には色々の援助を受けてゐた便宜があることと、同處は石北線と名寄本線との出會地であるから、交通が至便で、日蝕當日の天候如何によつて移動するにも便宜であつたから、此の地を撰んだのであつた。

六月15日朝、津輕海峡を渡つて函館からの列車で會々東京工業大學の竹内時男先生や英國アストン博士に御目にかゝつた。それに文部省の活動寫眞班も同車であつた。日蝕の御縁で竹内先生に知り會つて頂けた。観測地も同じ遠軽であつたので、歸り途も仙臺まで連れ會つて頂けたことは嬉しいことであつた。長万部から登別温泉で一泊し、翌16日は白老アイヌ部落を尋ね、アイヌ踊りも見て、鈴蘭の香が車窓に流れこむ愈々北海道らしい山野を馳せて、旭川で石北線に乗りかへた。旭川驛前には日蝕観測臨時列車“自然科學號列車”と“光芒號列車”の團體募集の大立看板が樹てられるのを見た。

遠軽へ着いたのは夜の21時であつたのに、高城、大口兩氏が日中の疲れを推して驛に出迎えて下さつた。誠に恐縮であつた。早速に伴はれて観測地である社名淵家庭學校へ行く。驛より約4軒の山の中であつた。そこに山本進氏も居られた。岡山の水野氏も丁度來てゐられた。漸く話しあつて遠軽へ歸りホテルに泊つた。

17日は女滿別の早乙女博士の観測所や、女滿別農場の中央氣象臺と東京天文臺との合同観測所、それに上女滿別の今光地電流観測所を見學して(之の時岡田綱走支廳長の多大な好意によつて同氏のタクシーに同乗の便宜を與へらる。感

謝す。)オホツクの波も穏やかに寄する濱邊を走り、上斜里についたのは17時頃であつた。浅井旅館に泊ることにした。

18日早朝英國隊ストラットン博士の観測陣を見學し、早忙として歸途についた。昨日の路を逆にとり、網走湖の昨日にもまさる美しい水景を見ながら17時頃遠輕へ歸りついた。

翌くれば19日、愈々その日が來た。夜中幾度か床をけつて窓をのぞく。何度見ても空には星もなく、どんよりと曇つてゐる。遂に明けたが、怪しい曇り空である。竹内先生も天候を氣遣ひ、驛の電話で各地の天候を調べられた。他所は皆上天氣なるに遠輕だけが曇り空である。思ひ切つて社名滞観測所へ出かけた。観測隊員一同氣遣かはしげな顔付である。それでも観測の準備着々進行。正午頃までには雲に切れ間も出來たが、依然たよりない。必らず晴れるとは誰1人保證するものがない。13時、14時と進む。雲は大方ちぎれて來た。青空もアチコチに見えてはゐる。時間が迫つて來る。一同陣地についてゐる。全く天祐を期するより外ない。フワ々々と漂ふ雲の間で愈々初虧が來た。それでもタイムがとれた。皆既まで1時間餘りある。之の間にどう天候が動くか？ 誰れも豫斷が出來ない。青空が次第に擴がつたが、一團の雲が全く太陽面を蔽ふて動かぬこと30分に及んだ。たとへ青空が廣くなつたとは言へ、之の黒雲が動かなければ見込なしである。皆既はもう20分位にも迫つてゐるのに、ところが幸なるかな——餘りにも幸なるかな、皆既數分前に、いつとはなしに此の雲が無くなつてゐた。動いたと言ふよりも消えて終つたのだつたらう。蝕分が次第に進んだ。私は竹内博士工夫の地上白布上のシャド1にも注意してゐた。3~4分前に綫陰影が動いた。太陽面は後髪毛一筋程残つた。忽ちそれが消え行く、最後に美しいダイヤモンドが現はれると共に月の周圍が彩層でクツキリ描き出された。と同時にコロナがバツと展開した。茫然と見入つてゐるだけだ。紅黄色の透き通つて輝くダイヤモンドの後へ、之の白銀(帶青)の光芒がヒトデ形に太陽の直径の7~8倍にも及ぶと思はれる廣がり！ 實に名稱すべからざる壯觀である。右下方約5度位の所に金星が爛々と輝いてゐる。そこに並んで火星が見える。観測隊各員は夫々の仕事に一生懸命である。黙々として進行、タイム・カウンタの聲のみ静寂を破つてゐる。沈黙の而も息詰る眞剣な空氣が漂ふのみ。見廻せば満月にも優る明るさながら、青黄味の凄さある暗さが地上を蔽ふてゐる。之の瞬間がすぎた。生光のダイヤモンドが再び現はれたと共に、コロナはかき消す様に消えた。金星も火星も！ 世は元の晝にかへつた。一同は喜々として汗を拭いた。眼からは成功の喜びの涙がながれてゐる。思はず萬歳を叫ぶ。拍手が響く。握手が交換されてゐる。かくて全く皆既は成功した。全く天祐であつた。全く夢の様な思であつた。

然し私は後からもつと注意して観測すればよかつたと思つたことが澤山に思ひ浮んだ。参考に其の主なるものをかいて見る。

1. 縞陰(シャド・バンド)の様子をもつとよく見ればよかつた。例へば縞模様の状態及其の動きの様、濃さ等。
 2. 彩層、コロナ、プロミネンス等の形状色彩をもつとよく認識する工夫をしておけばよかつた。
 3. コロナの廣がりを數字的(角度)に測る工夫をしておけばよかつた。
 4. 皆既の時の明るさをもつとよく見ればよかつた。
 5. プロミネンスの形状及數にもつと注意すればよかつた。
- 等々。

質 疑 應 答

問ひ： 星霧を M 何番 N. G. C. 何々と呼びますが、相互關係はあるのですか？ 又メシエ番數は多く 100 以下で、N. G. C. の方は一千臺のものが澤山ありますが、どこに基準があるのですか？ (Ad生)

答へ： 今から160年前にフランスの Messier といふ天文家が彗星搜索の場合にまぎらはしいので、當時一應知れてゐた星霧や星團のカatalogを作つたことがあります。之れがメシエ表で、中に103個の天體が列記されてあります。又、今から50年ほど前に英國の Dreyer といふ天文家が六千餘個の星霧や星團を表にしたものが New General Catalogue of Nebulae and Clusters (略して N. G. C.) です。この N. G. C. と M とは別に何の關係もありません。山本博士の標準天文學第272頁を御覽なさい。(L)

問ひ： ノルトンの星圖は現在幾らぐらゐの價ですか？ (Sa生)

答へ： ノルトン星圖は最近に色刷りで立派な訂正増補版が1940年に出版されましたが、價格は不定です。大體 20 圓内外。丸善へでも御問ひ合はせ下さい。(K)

問ひ： 僕は自分の家の經度と緯度とが知りたいのですが、どうしたら宜しいでせうか？ (Sa生)

答へ： 陸軍の測量部から出版されるものや、海軍水路部から出る海圖が宜しいでせう。他には信賴すべきものではありません。(K)

問ひ： 馭者座 ϵ 星は何型の變星ですか？ 其の週期、スペクトル型、變光性等御教へ下さい。(Ad生)

答へ： アルゴル型の蝕變星で、週期は27年、スペクトル型はF5です。(Y)